

2014年度第3号のレター発行となります。本号では、先般12月6日(土)に東京未来大学にて開催されました第39回支部例会(兼関西・中部支部合同大会)での発表要旨、並びに、平成27年3月14日(土)に開催を予定しております第40回支部例会及び総会についてのご案内を掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長 郭 潔蓉

◆第39回 関東支部研究例会兼関西・中部支部合同大会 ご報告◆

2014年12月6日(土)、東京未来大学B棟221/225教室において第39回関東支部例会(兼関西・中部支部合同大会)が開催されました。当日は、2つのセッションに分かれ、16名の会員による研究発表が行われました。多彩な研究に触れることのできる大変有意義な例会となりました。終了後、北千住駅近くにて懇親会を行い、三支部の親睦を深めました。以下、例会での研究発表の要旨を掲載致します。

◆開会の挨拶： 関東支部長 近藤俊明（東京未来大学）

セッションA 発表要旨:発表順に

1. テレビ・ドラマの研究と学術的伝統 — *Star Trek* の場合 —

浜松学院大学准教授
川口 雅也

Star Trek の名を冠したテレビ・シリーズあるいは映画はどれも原作者 Gene Roddenberry の世界観ゆえに他に類を見ない作品として成り立っており、それが 50 年近くに亘り世界各地で愛され続けている最大の理由であることに疑いの余地はない。しかし、制作に関わる作り手たち一人一人がその世界観に共鳴している訳でもなく、そこから逸脱する作り手の意図が『スター・トレック』を古典としてではなく現在進行形の作品として成立させている要因となっているのもまた事実である。

一人の作家によって創作される狭義の文学と異なり、複数の作り手たちから成るテレビ・ドラマにおいては、その制作の在り方に適した研究方法がとられるべきである。ここまでは作品論、ここからは演技論などと細分化した従来の研究方法に囚われていたのでは、複数の作り手たちの意図が混在する総体としてのテレビ・ドラマの本質を理解することはできない。

本発表においては *Star Trek* を具体例に、テレビ・ドラマの研究においては、細分化された研究分野への研究者の棲み分けが当然とされる学術的伝統からの飛躍の必要性を提言したい。

2. 1920年代の中国における俳句の翻訳とその影響

宇都宮大学国際学研究所博士後期課程
張 婷婷

20世紀初頭の中国は、内戦や欧米列強からの侵略などの問題を抱え、社会情勢が不安定であった。そのような状況の下で、孫文たちによって社会の変革をめざす辛亥革命(1911)や五・四運動(1919)などが起こった。一

方、当時の文学者らは外国の文学に目を向け、文学運動を通じて自国を救う方法を模索し、それらの運動の一つとして、外国文学の翻訳・紹介が活発に行われるようになった。日本文学も欧米諸国の文学と同様に翻訳がなされるようになり、小説や散文など様々なジャンルの文学作品が紹介されるようになったのと同様に、1920年代からは俳句も中国に紹介されるようになった。

これまでの中国における俳句の受容をめぐる先行研究では、今田(2002)や荊瑤(2014)を代表として、日中比較文学の観点から1979年以降の俳句の翻訳と漢俳の出現が中国における俳句の受容の重要なポイントと位置づけられている。しかし、中国における俳句受容研究を行うにあたっては、現代における受容研究だけでは不十分で、俳句が最初に中国に紹介された時期にも言及する必要がある。1920年代における俳句の翻訳と当時の中国文学の動向を明らかにすることは、中国文学史研究の空白を埋めるものとして、価値のあるものと発表者は考える。

本発表では、1920年代に中国で始まった俳句の翻訳作品を取り上げ、それらがその当時の時代背景とどのようにに関わり、中国の文学にどのように影響を与えたかを「硬訳説」という翻訳理論の発展、短詩の出現ならびに文学観の革新などの面から検討する。

3. 基礎英語シラバスについての一考察

東海大学准教授
高橋 強

今回の口頭発表では、近年、入試も多様化し、学生の著しい英語力低下が叫ばれるなか、大学英語教育に於いて学生に英語の基礎学力を付けさせるために様々な大学で基礎英語を充実したものにさせようと努力している大学がたくさんあり、大学においてはリメディアル英語教育を実践するなど基礎を徹底的に鍛え、ベーシックな英語を駆使し、アウトプット中心の素晴らしい授業実践をしている大学があることも事実である。そこで、共通する基礎英語の育成に主眼を置き、高等学校の英語Ⅰ程度の英語を習得できていないまま新生として大学へ入学してきた基礎英語力が身につけていない学生の英語力を如何に最大限に伸ばし、学力を定着させるかという点に着目し、基礎レベルの学生に相応しいシラバスをデザインすることが重要となる。シラバスに沿って、様々なメソッドを効果的に授業に取り入れ、より効果的に授業実践を行うことが出来るように試みをまとめたものが今回の発表である。また大学英語教育において、単に文法項目の習得に限らず、最近注目されてきている Focus on Form(F on F)というメソッドを取り入れた英語教育についても今回の口頭発表で述べることにし、それに付随して、Dictogloss というアウトプット中心のメソッドを文法項目の習得と同時に取り入れ、学生間でペアワークをしてもらい、ディクテーションをすることにより音声に慣れさせ文章の中で英語を音、文字、構文など比較的平易な文章の中で習得させ、Focus on Form というメソッドにより大変有益効果が期待できる授業をデザインしていくことを目的とし、基礎英語学習者にどのような方法で、英語の授業を進めていくかという明確な意図をシラバスの中でデザインすることとする。上記した教授法についても口頭発表で述べることにする。また、これらの教授法をシラバス通り実際の授業で実践することを目的とし、考察を加えたものである。いずれにせよ、学生の英語の基礎学力を伸ばすことが大学英語教育において急務であることは間違いない。

4. 日常談話とヴァーチャルにおける役割語としての幼児語 —成人女性の幼児キャラクタに着目して—

同志社大学文化情報学研究科博士前期課程
劉 益帆

日本人の日常談話では、特に、若い女性の会話では、オノマトペを中心に、幼児語の特徴を持つことばがかなり出現している状況が観察される。しかし、成人女性が本当に幼児語を使うのか、これは大きな問題である。こ

の現象を扱うには、「役割語」ということばを導入しなければならない。ここでは、簡単に言うと、われわれが普段使用していることばと違い、特定のキャラクタと結びつき、特徴のあることば遣いのことを「役割語」と呼ぶことにする。

本発表では、成人女性が、日常談話の場面で、幼児キャラクタを発動し、役割語としての幼児語の使用実態を調査し、実際の使用実態とヴァーチャルの使用実態との差を明らかにすることを目的とする。調査方法としては、成人女性の日常談話を研究対象として、20回分の会話データを採集する。そして、ヴァーチャルことばと比較し、役割語としての幼児語の使用実態を明らかにしていく。

5. アカデミック・ディベートのライティング養成効果に関する一考察(2)

—Model Debate Corpusによる語彙に関する研究—

同志社大学文化情報学研究科博士前期課程

橋尾 晋平

橋尾(2013)では、アカデミック・ディベートという学習方法が、ライティング能力の向上に寄与するということを、ライティング能力を語彙・文法・談話の3つの観点から検討し、ディベート経験者と非経験者の英作文テストの比較を通して明らかにした。

本研究では、特に、語彙面に関して、なぜ経験者の英文が非経験者の英文よりも優れているのかを、経験者に関連する英文を分析することで明らかにしていく。

本研究の分析のために、実際のディベートの試合で使用された英文で、かつ一般に公開されている英文を5年分収集した“Model Debate Corpus”(以下MDC)というものを作成した。アカデミック・ディベートには指導者が存在せず、上級者が下級生に教育するシステムが多い。よって、学習者は上級者が試合で用いた英文を通してスピーチの型を学ぶので、試合で使用された英文を収集したこのコーパスは、経験者の扱う語彙の分析する上で重要な指標になりうる。

本研究では、MDCの平均異なり語数や語彙レベルについて、英字新聞や洋画、資格取得試験関係のコーパスと比較・検討を行い、また、MDCにおける頻出語句・表現の分析も行っていく。

6. セネガル・ダカールにおける庶民の価値観とその感覚変容

—タクシー運転手からの聞き取り調査を通して—

創価大学教授

鈴木 宣行

発表者は2014年2月15日から3月7日までの3週間に渡って、セネガル共和国ダカール市において、「民衆」層の一部を構成している約80台のタクシー運転手に対する聞き取り(1台につき、乗車時間は約30分)を実施し、ダカールの「民衆」が日常生活の現状をどのように把握し、如何に対処し、改善を試みようとしているのかという点に絞って調査を行った。

タクシー運転手には、つぎの4項目—1. ダカールのドーナツ化現象とタクシー・マンの居住地域、2. タクシー運転手と価値観としての「一夫多妻」、3. タクシーを通して見る価値観としての「政治」と「民衆感覚」、4. タクシーの価値観としての「サービス」—について聞き取りを行った。

「人口のドーナツ化」はアフリカの多くの首都圏を中心とした都市部で見られる現象だが、ことにダカールでは周辺地域の開発が急激に進み、新たに建設された高速道路沿いには宅地が開発されている一方で、貧困地域も拡大し、格差も拡大している。タクシー運転手が多く住むのはこの貧困地域である。「民衆」という層はこの地域に多くが居住している。そして、彼らのほとんどが「一夫多妻」の日常生活を送っている。彼の日常生活を考える上で、「一夫多妻」は避けて通れない課題である。ただ、都市部ではダカール大学での聞き取りをした高学歴

の若者たちとタクシー運転手たちとは「一夫多妻」についての考え方には大きな隔たりが見えるようになっていることも注目すべきである。また、日常生活と政治の関係を見てみると、極めて民主的な手法を有していることが見てくる。他の多くのアフリカ諸国では、選挙の度にクー・デターをはじめ、大小の混乱が起こることが当たり前のようにになっているが、ここセネガルでは、若干のデモなどは行われても、大規模な混乱状態には至らない。それは何故なのか。この点はアフリカの課題を考える上でも重要である。さらに、タクシー運転手、ことに若い運転手から見てくる彼らの「価値観」の変化である。中年以上の運転手と若い運転手との間における「価値観」の相違、その変化を考えていくことは、今後のセネガルの将来像を考える上で、大きな手がかりとなり得るものと考えている。若い運転手たちの携帯電話の使い方にも着目していく。家庭に電話がなくても、携帯は持っている人々が急激に増加しているのは、どのアフリカ諸国でも同様であるが、若い運転手たちはこの携帯電話を彼らの仕事の「武器」として有効に活用し始めている。

「物価」の問題は日常生活に大きく関わっており、「民衆」にとって最重要課題である。全ての物の値段を上げることができないが、彼らが日常的に消費する物についても触れていくことにする。

このように、タクシー運転手を通してセネガルの人々の価値観の変化を見ていくことは、セネガルの将来像を考えていく上で、重要なことである。

7. 依頼場面における断り表現 —「親しさ」に着目した日尼対照研究—

同志社大学文化情報学研究科博士前期課程
キャンディー

本研究は、日本語母語話者(JNS)とインドネシア語母語話者(INS)が、依頼場面において、親しさの度合いに応じてどのような断り表現を使用するかを明らかにすることを目的とする。また、親しさの度合い・使用される断り表現の意味公式の数(表現の長さ)・依頼内容の軽重・依頼者に気分を害するという評定の間には、どのような関連があるかも考察する。

結果としては、JNSの場合、「謝罪」「理由(曖昧)」というパターンが最も多く使われ、INSの場合は、「謝罪」「不可表現」というパターンが最も使用される。関係維持のために、JNSは「将来の接触到言及」、INSは「延期・意志の表明」というストラテジーを使用する。

断り表現の長さについては、依頼の負担にかかわらず、JNSやINSも知り合うようになると、あるいは、とても親しくなると、意味公式の数が有意に増え、断り表現は長くなる。依頼者に気分を害する評定に関しては、JNSの場合、断る際に依頼者に気分を害するとは思わなく、INSの場合は、親しくなれば相手の気分をより害する。吉田(2010)と藤原(2004)では、JNSは不可表現を避ける傾向があると示されているが、本研究には、JNSは不可表現を避ける傾向が見られなかった。

8. 建築という名の「芸術」についての試論 —存在の一時逗留の場としての建築について—

東京大学宇宙線研究所重力波推進室 学術支援専門員
野口 司

西洋では既に紀元前後のローマで建築の「美」や「装飾」の意味が、ウィトルーウィウスによって語られていた。その上、当時の遺跡の修復手法も記述され、後年、ルネサンス期にアルベルティによって体系化された。これは、「ヒト」という生物界上の種が保温のための体毛を持たないが故、外気から閉じられた家などの空間に「住む」という営為を太古より行ってきた証左の一つであり、今日の工学の分野内でも他分野と比較して特殊性を持つ所以でもある。(例えば、超伝導の実験装置を想起すると明白である)。

「学際的かつ比較文化的な建築様式研究の難しさ—フンデルトヴァッサー・安藤忠雄の建築から読み解く」で

は多角的な考察を行ったが、考察・発表・質疑応答を通じてより根源的に「住む」という思惟を哲学的に深化させる必要性を考えるに至った。

本発表では主に、アルベルティの『建築書』とハイデッガーの『ヘーベル—家の友』足がかりに、人間存在の本質と「美」すなわち、芸術との関係性、更には人間存在にとって不可欠な「家」と芸術・美との関連性について考察したい。また、必要に応じてボルノウなど存在と空間への言及や、柳宗悦などを参照しながら芸術と建築の連関についても言及し、可能であれば世代間倫理と芸術との関係性についても論じたい。

セッションB 発表要旨:発表順に

1. 1940～1945年の日本民族学における汎アジア主義の影響 —松本信広の著書に関する一考察—

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程
ペトラ・カルロヴァー

本発表は民族学者であった松本信広(1897～1981)の著書の中に現れる汎アジア主義の影響を考察する目的である。1930年代に、松本は日本の汎アジア主義を批判していた。しかし、1940～1945年、汎アジア主義がアジアを考える正式な理論枠組みになったので、松本も東南アジアに関する著書に汎アジア主義的な発言を導入せざるを得なかった。

汎アジア主義の影響で、松本は、民族学に繋がり薄い当時の仏領インドシナ問題について記事を書き、民族学的な論文に汎アジア主義のプロパガンダレトリックを取り入れ、ベトナム人に対する日本の文明化使命を主張していた。その同時に、原始的文化を保っている諸民族に対して日本文明を伝えることに、民族学者として反対していた。賛成しなかった汎アジア主義的な発言を取り入れた結果、松本の主張の中に多数の矛盾が発生した。その上に、慶應義塾大学の卒業生と民族学者として、汎アジア主義の重要な概念であった日本人の聖なる起源論を信じなかった。

2. 門脇俊介の現象学的行為論 —ハイデガー解釈の越境的拡充について—

弘前大学人文学部講師
横地 徳広

ハイデガーは1920年代の早い時期にヒトラー『わが闘争』を読んでいたという指摘がある。その書では、アリア人を優等人種、ユダヤ人を劣等人種とする稚拙な「善悪二元論」が語られていた。もちろん、ハンナ・アレントのような高弟がそうした指摘を否定するケースもあるが、いずれにせよ、1933年にナチスに入党してフライブルク大学総長を務め、「地球大で明確になった技術と近代的人間との出会い」(『形而上学入門』)を「国家社会主義」のうちに見出したことは、彼の歴史的事実である。

ハイデガー研究では、こうした歴史的事実とハイデガー哲学の相互関係をどう考えるのか、これが問題になる。しかも、「日常性の解釈学」と「本来性分析」の関係如何という、それ自体で難しい『存在と時間』解釈が、この問題に絡んでくる。

この錯綜したハイデガー問題に対して、明快な解釈を示した哲学者がいた。早逝した門脇俊介氏のことである。彼は、独仏の大陸哲学と英米の分析哲学を架橋する観点から『存在と時間』を読み解き、「日常性の解釈学」に

重心において「現象学的行為論」という分野を開拓した。「本来性分析」も、この観点から理解されていく。

本発表では、門脇氏の現象学的行為論がどのようにハイデガー解釈の越境的拡充を実行し、その政治的中立性を確保したのか、この点を見定めたい。

3. 日中若者ことばの表現構造の諸相 —構成・品詞・造語法をめぐって—

同志社大学文化情報学研究科

蘇 文文

若者ことばは、現代日本語の一部分として、研究者の間でも注目されてきている。若者ことばは、会話を促進したり、仲間意識を強めたり、イメージを簡潔に伝達したりするという機能を持っているため、若者ことばの研究は、日常のコミュニケーションを考察するうえで、重要な役割を担うと考える。本発表では、日中両言語における若者ことばの表現の異同を明らかにする。その際、日中両言語の若者ことばには、どのような系統的な相違があるかに焦点を当て、単語の構成、品詞、造語法などを中心に分析を行う。データについて、第1段階では、日本語のほうは、『現代用語の基礎知識』に載せた若者ことばを抽出する。中国語のほうは、日本語のようなデータベースがないので、先行研究と掲示板から用語を抽出する。第2段階では、第1段階で収集した中国側の用語の客観性を確認するため、20代中国語母語話者を対象にアンケート調査を行った、若者ことばと認める用語を抽出して本研究の中国側の研究データとして使用する。そして、若者ことばの定義、造語法の分類などに関して、先行研究を概観した上で、収集した用例に分析を加え、日中両言語の若者ことばの特徴を指摘する。

4. オーストラリアにおける行方不明の子ども —ボーモント家事件以降の事例から—

静岡県立大学准教授

澤田 敬人

本発表では構築主義の立場からレトリックを用いた社会問題の構築方法を整理する中で、行方不明の子どもをめぐる米国の文脈での事例研究との比較が、米国国外の豪州での事例研究と間で意味を持つものであることを示す。社会問題の社会学において研究の焦点は、一般的に社会問題と呼ばれる客観的状态ではなく、何らかの状態についてクレームを申し立てる個人やグループの活動としての社会問題に置かれる。構築主義の研究者ジョエル・ベストは1980年代の米国で行方不明になった子どもの問題の構築をめぐるレトリックの事例研究を行い、「行方不明の子ども(missing children)」という言葉は、家出少年、子どもの連れだし、見知らぬ人物による誘拐という複数の事態を一つにまとめた形で1981年に、クレーム申し立てを行うグループによって作られたと指摘する。クレーム申し立ての基本的な形態は問題を定義することで、1980年代の米国におけるチャイルド・ファンドによる行方不明の子どもに関する定義を整理し、豪州における同様の問題の定義との比較を行い、レトリックの諸相を明らかにする。豪州の事例研究としては、1966年に南オーストラリア州アデレード近郊で発生したボーモント家事件をめぐる、1980年代さらに2000年代に語り直された時の問題の定義を中心に論じる。

5. 共感的ダイクシスをめぐって —中英対照研究の観点から—

同志社大学文化情報学研究科博士課程前期

劉 爽

本発表では、共感を「会話をする際に、話し手は相手の立場を考慮し、相互の感情を含め、会話をよく理解させるため、視点を移動すること」と定義する。共感的視点から、ダイクシスの選択により、話し手と聞き手の心理

的距離および近さの度合はどのように変化するかを取り扱う。また、対照研究の視点から、英語と中国語における共感的ダイクシスをめぐって、それぞれの特徴と使用傾向を明らかにすることを目的とする。

データの収集については、英語と中国語における日常会話でよく使われるデータを言語資料として採用するために、演説、トークショーとテレビ番組から人称ダイクシスのデータを抽出する。その中から、直示的ダイクシスと共感的ダイクシスに分け、特に、共感的視点から見られたダイクシスを定量的に分析する。両言語における、共感的ダイクシスの表現形式を対照した上で、それらの効果や特徴を探求する。

本研究の調査により、共感的ダイクシスというのは、話し手の主観性に関わり、話し手によって、カメラ・アングル(視点)を聞き手の立場に置くと、共感的視点が生じると考えられる。共感により、談話を緩和する役割、話し手と聞き手の心理距離を縮小する役割、および、コミュニケーションを円滑する役割を担っていることが指摘できる。

6. ボブ・ディランの歌詞から読み取れる20世紀から今日迄

無所属 詩人
西村 純

ボブ・ディランはデビューの62年から一般的に神格化された伝説のフォークシンガーとなっている(バス・ボイコット事件、ワシントン大行進、公民権運動とヴェトナム戦争の世相からか?)が、実際はブルース色が強い(フォークー辺倒という意味ではピート・シーガー、ジョン・バエズ、PPM等だ)が、しかし個人的な歌を歌ってきた人だ。彼の書いた歌詞から数えきれない程影響を受けたプロが居る。ビートルズにはディランも影響を受けたが、彼がビートルズに与えた影響も大きいものがある(特にジョンとジョージがだ)。ロック界で初めて二枚組アルバムを出すとビートルズもそれに倣うという様に。今回はディランの名曲二つLike a Rolling StoneとVision of Johannaから歌詞を分析し、後にこれらからインスパイアされていると思われるレッド・ツェッペリンStairway to Heaven、Mr.Childrenトウモロウ・ネヴァ・ノウズの二曲との関連から考えてみたい。とりわけ彼の歌詞の持つシニシズムとアイロニーを読み取りたい。その分析から見えてくるものは20世紀思想文化とはどういうものだったか、なのだ。

7. 日常談話における日・中モダリティの関与表現についての一考察

同志社大学文化情報学研究科博士課程前期
李 興雅

本論文では、異なる言語体系と文化背景も考慮に入れ、日中両言語それぞれの自然会話におけるモダリティの使用実態と使用特徴の相違を明らかにし、中国人日本語学習者のモダリティの習得を考察することを目的とする。日本語と中国語の実際の会話を研究資料として、仁田(1991、2000)、益岡(1991、2007)によって分類された各々のモダリティの分布状況を調べ、関与の表現機能も考慮に入れて、日中両言語のモダリティの対照研究を行う。

日中で放映されたインタビュー番組を録音・文字化し、データとして使用する。まず、仁田(1991、2000)、益岡(1991、2007)のモダリティの分類に従って、日中両言語の各モダリティの使用傾向の相違を明らかにする。次に、実際の会話例を出しながら分析し、その使用実態と表現機能の相違が生じる原因を考察する。

また、蔣(2010)の関与の類型も考慮に入れて、改めて談話中の各々の関与類型のモダリティ分布状況と使用実態を分析することで、両国言語におけるモダリティの関与の表現機能の相違を明らかにする。

8. 変化著しいカンボジアにおける美術教育の価値と可能性

－JHPとの美術教育普及プロジェクトの成果をもとに－

東京未来大学教授
鈴木 光男

民主化後20年を迎えたカンボジアは、今大きく変わろうとしている。その中で、新学習指導要領の改訂作業が進められているという。そのような折りに、小山内美江子氏が代表を務める「学校をつくる会Japan Team of Young Human Power(以下JHP)」と共に、2014年6月30日にカンボジア教育大臣へ美術教育導入を直接提言することができた。

具体的には、この2年間推進した美術教育普及プロジェクトの成果として、児童の絵画表現や校長・教員の意識などがどう変化したのか、またそれにより具体的な授業実践がどう変化したのかなどに関するデータ・資料を提示した。

また、それら成果に加えて、美術教育のもつ5つの力「個人に与える力」「教育に与える力」「産業・経済に与える力」「国に与える力」「国のイメージ向上」を提示した。

大臣からは、美術教育の重要性を鑑み、今後カリキュラム開発局と共同してどのように美術教育を導入するかを具体的に話し合い、準備を進めて欲しいとの回答を得た。JHPとまずはテキスト改訂作業に取り掛かり、教員養成などの課題と合わせて検討し、来年度にはさらにまとまった具体案を提示する予定である。

◆関東支部30周年論文集刊行に関するお知らせ 鈴木宣行（創価大学）

◆閉会の挨拶：中部支部長 澤田敬人（静岡県立大学）

* 閉会后、懇親会を開催した。

* 連絡事項 *

● 次回の「関東支部第40回例会・2014年度総会」は、次の通り開催致します。

1. 開催日：2015年3月14日(土)

2. 場 所：東京未来大学

3. 時 間：13時～18時(予定)

4. 発表希望締切：2015年2月13日(金)(厳守)(学会HP上に掲載し、会場場所などを広報するため)

但し、上記締切日は「発表者氏名、所属、発表題目のみで構いません。要旨は、2月28日までを目処に事務局にメールにてご送付願います。

発表予定会員はメールにて事務局(郭:kaku-ryo@tokyomirai.ac.jp)までご連絡ください。

● 「関東支部創設30周年記念論集」について(再掲)

お陰さまで、関東支部は2015年6月に創設30周年目を迎える運びとなりました。支部では「創設30周年記念論集」の刊行を企画しております。論文集の刊行予定は2016年1月、論文原稿の締切は2015年9月末日を予定しております。応募要領等詳細につきましては、追って関東支部のホームページに掲載致しますので、ご承知置きのほどお願い申し上げます。